

学習発表会台本『杜子春』

(第1幕～第4幕 / 演出・効果音・チャプター付き / 高学年向け・約20分想定)

登場人物 (目安15人・増減可)

1. 杜子春 (主人公)
2. 語り手 (ナレーション)
3. 老人 (仙人)
4. 王さま
5. 家来A
6. 家来B
7. 町人A
8. 町人B
9. 町人C
10. 町人D
11. 町人E
12. 母
13. 鬼A
14. 鬼B
15. 鬼C

上演時間ガイド

第1幕 5分 / 第2幕 5分 / 第3幕 7分 / 第4幕 3分 (演技の間・移動・効果音込みで20分前後)

第1幕「没落の春」

杜子春が財を失い、町人たちの視線にさらされる。街のざわめき、時間の流れを「間」で見せる。

【効果音・音楽】 風／遠い鐘／足音のループ／ざわざわ（小声）

【演出】 舞台は薄橙の明かり。杜子春は中央で座り込む。町人A～Eは左右客席側通路から入場し、観客の前を横切ってから舞台へ。

語り手「或る春の日暮れのことです。洛陽の西の門の陰に、杜子春という若者が、空を仰いで座っていました。」

町人A「あれ、杜子春じゃないか？（指差す）」

町人B「昔は金持ちで、毎晩のように賑やかだったって噂の人だろ。」

町人C「いまじゃ着物もほころびだ。借金だって残ってるらしい。」

町人D「人は金で変わる。持てば寄って、無ければ離れる。」

町人E「でも、あの人は……どこか優しい目をしてる。」

【演出】

町人たちは半円に散り、観客に向かって交互にセリフ。各セリフの後「ざわ…」と一拍。

語り手「杜子春は、声を失ったように、ただ黙っていました。」

杜子春「（ゆっくり顔を上げ）どうして私は、こんなにも空しいのだろう……。」

町人A「欲が深かったからだ。贅沢しすぎた。」

町人B「友だちも去ったのか？」

杜子春「（小さく）友だち……本当の友は、どこにいるのだろう。」

【演出】 【間】 3秒沈黙。風の音を少し強める。

語り手「そのとき——」

【演出】 チリン……（鈴の澄んだ音）

老人（仙人）「杜子春よ。」

杜子春「（驚いて）どなたです？」

老人（仙人）「おぬしの嘆きを聞いていた。金に心を縛られてはならぬ。」

町人C「誰だ、急に現れて……（ひそひそ）」

老人（仙人）「立て。空を仰ぐだけでは、何も見えぬ。」

杜子春「立ち上がる……？ 私に、まだ道があるというのですか。」

老人（仙人）「道はいつでも目の前にある。ただ、心が曇ると見えなくなるだけだ。」

【演出】 杜子春、ゆっくり立ち上がる。スポットを強めに。

語り手「こうして杜子春は、もう一度歩き出すことにしたのです。」

【演出】 暗転【2秒】→ 次幕へ

第2幕「仙人との再起と宴」

仙人が金の虚しさと心の宝を説く。杜子春は再起し、王に召し出され宴が開かれる。人の手のひら返しを群読で表現。

【効果音・音楽】 笛 / 太鼓 / 手拍子 / 歓声SE

【演出】 明かりは徐々に明るく。背景は金色の布や紙で華やかに。

老人（仙人）「金は道具にすぎぬ。道具に使われるのではなく、道具を使いこなすのだ。」

杜子春「もし、また富を得ても、私は同じ過ちをくり返すでしょうか。」

老人（仙人）「おぬしの心次第だ。富は心の鏡。曇れば曇り、澄めば澄む。」

語り手「やがて、杜子春は働き、人に尽くし、信を集め、再び財を得ました。」

王さま「杜子春よ、よくぞ立ち直った。われはおぬしを重く用いる。」

家来A「お館様、祝宴の用意が整いました！」

家来B「笛と太鼓を。皆の者、手を打て！」

【演出】 笛、太鼓、手拍子（3小節ほど）

【演出】 宴の所作：杯を受け渡す、笑う、拍手。舞台下手から上手へ練り歩き。

町人A「さすが杜子春さまだ！」

町人B「いやあ、昨日の顔とは違う。」

町人C「人の心って不思議だね。金があれば笑い、無ければ背を向ける。」

町人D「（観客に）みんなはどう思う？ それでいいのかな？」

町人E「.....私は、金より、心を見たい。」

杜子春「（独白）笑い声の渦の中で、なぜか胸が静かだ。私の心は、どこへ向かうのだろう。」

王さま「杜子春、これから先も民のため尽くせ。富は民と流れる川のように使うのだ。」

杜子春「はっ。肝に銘じます。」

語り手「だが、夜の帳が下りるころ——杜子春の前に、再び影が揺れました。」

【演出】 明かりを落とし、宴の人々はスローモーションで退場。雷の薄いSEから次幕へ。

第3幕「試練の夜」

鬼たちが現れ、鞭、火の車、針山の試練を与える。母が連れて来られ、声を出せば母を罰するという究極の試し。

【効果音・音楽】雷鳴／ドン！（太鼓）／車輪／風／金属音／静かな笛・鐘

【演出】暗転後すぐ雷鳴。青と赤の照明。舞台奥から鬼A～Cが大股で登場。

鬼A「杜子春！覚悟はよいか！」

鬼B「心の底まで見せてもらおうぞ！」

鬼C「まずは——鞭だ！」

【演出】ドン！バシッ！（太鼓＋板を叩く音）×3

杜子春「うあっ……！しかし……耐える……（膝をつく）」

鬼A「火の車、用意！回せ、回せ、回せ！」

【演出】ゴロゴロ……（車輪）＋風音

【演出】杜子春、円を描いてゆっくり回る所作。苦痛の表情。

杜子春「体が裂けるようだ……けれど、声を出すものか……」

鬼B「針山だ。這い上がれ！」

【演出】金属のきしみ、風。

杜子春「（息を切らし）痛い……でも、心は諦めない……」

鬼C「面白くなってきた。——母を連れてこい！」

【演出】照明を落とし、柔らかなスポット。母がゆっくり現れる。静かな笛と鐘。

母「子春……どうか、声を……出しては……なりません……」

杜子春「母上！（一步踏み出し、止まる）」

鬼A「声を出したら、罰はこの女に！さあ、どうする！」

【演出】【間】沈黙5秒。杜子春、拳を握りしめ、震える。

杜子春「（心の声・観客に向け）叫びたい！助けたい！

でも——耐えることが、母を守る道なのだ……」

母「私は大丈夫……。おまえの心が、強くなるのを……見ている……」

鬼B「まだ沈黙を守るか。ならば——さらに！」

【演出】ドン！ドン！ドン！（太鼓を連打、3拍の後、静寂）

【演出】この静寂を長めに（3～4秒）。観客にも息を止めさせるくらいの間。

鬼C「……フン。」

鬼A「ここまでだ。こやつ、声を出さなんだ。」

鬼B「試練は終わりだ。退け！」

【演出】鬼たち、後退。青赤の照明から白へ。鐘の音。仙人が現れる。

第4幕「覚醒と帰結」

仙人が教えを述べ、杜子春は心の宝に気づく。群読で締め、観客へメッセージ。

【効果音・音楽】鈴／静かな笛／終幕の太鼓

老人（仙人）「よく耐えた。おぬしは、声を出すよりも難しい沈黙を選んだ。」

杜子春「母の息遣いが、心の奥で私を支えました。金では買えないものがあると、はっきりわかりました。」

老人（仙人）「覚えておけ。富は道具、心は羅針盤。道具は羅針盤の指す方へ使うのだ。」

語り手「こうして杜子春は、心の宝を知り、歩き出しました。」

町人A「わたしは、人を見かけで決めつけないようにしたい。」

町人B「わたしは、困っている人に声をかけたい。」

町人C「わたしは、手のひらを返す自分に気づいたら、直したい。」

町人D「わたしは、富を正しく使いたい。」

町人E「わたしは、だれかの心の支えになりたい。」

杜子春「私は、母のように、人を想う心を忘れません。」

全員（群読）「「人の心は、金よりも尊い。」」

【演出】一呼吸おいて、全員で観客に向かって一礼。

【演出】太鼓 ドン！ 鈴の余韻。

語り手「ご覧いただき、ありがとうございました。」

【演出】幕。

舞台セット・小道具（簡易）

- 背景：色照明で夕→金色→青赤→白の変化を作る。
- 小道具：杯、扇、布（金色／赤）、太鼓またはカホン、板（鞭SE用）、鈴、棒（針山演技の支え）。
- 鬼の面や腕章（色違いでA/B/C）、仙人用の杖。
- 幕間の転換は出演者が演技の流れで行い、止まらない。

時間調整のヒント

- ・ 各幕の【間】を意識して2～3秒長めに。
- ・ 宴の行進や手拍子を8～12小節に延長可。
- ・ 第3幕の沈黙（母の場面）を5～7秒に延ばすと緊張感が増す。
- ・ 群読は二度くり返す演出も可（客席とコール＆レスポンス）。